

私は小学校から中学校にかけて、とても嫌で気にしていることがありました。あるとき、小学校で色覚の検査がありました。この中の数字を言いなさいとか言われ、私はあまり答えられませんでした。なんだか、わからない自分がすごく情けなく感じました。そのとき初めて自分自身が「色覚異常」であることを知りました。日常生活ではさほど不便を感じていなかったのですが、それから自分は人と少し違うんだと思うようになりました。社会の授業のとき、先生がOHPを使って説明をしていました。細い色ペンで書かれたグラフでした。「緑が〇〇で、赤が〇〇です…」…私ははっきりとはわかりませんでした。そんなことが一度や二度ではなかったのです。でも、言えませんでした。言うことが恥ずかしい。友達から「え？わからんの？」とか言われるのもいやでした。だから、ずっと黙って過ごしてきました。友達同士で、色の話になるのもいやでした。明るいところで明暗のはっきりとした色は大丈夫なのですが、暗いところでの色の区別がつきにくい私は、色の話になるとできるだけ話さないようにしました。ごまかすことも多々ありました。そして、私は、大学の物理を専攻しました。入学して間もなく、大学の保健管理センターのようところに呼ばれました。

「あなたは、理科の先生を目指されてるんですか？」私は、「もちろんそうです。」と答えました。「採用試験や就職試験等で不利になることがあると思います…」「え？」頭の中が真っ白になりました。私は、「他の教科の免許をとることはできますか？」と尋ねました。担当の方は、「とることは可能だと思います。詳しくはあなたの科の事務室で聞いてみて下さい。」と話されました。私は、すぐに事務室に走りました。事務室の方から私は、こう言われました。「確かに副免(自分の専攻した科目以外の教科の免許)をとる方法があります。他の教科を受講していき規程の単位がとれれば大丈夫です。ただし、あなたの科は、学内で一番忙しい科ですから4年間では厳しいと思います。5年間であれば大丈夫だと思います。」私は、さらに「4年間では絶対にとれないんですか？」と尋ねました。「そうですね…。私の知る限りで、4年間で副免をとった人は一人もいませんからね〜。」私は、途方に暮れました。それから数日間、ずっと悩みました。そんなとき、たまたま高校時代のバレー部の友達から連絡が入り、そのことを話しました。弱気になっていた私に「お前、あれだけ教師になりたいって言ってたやろ？そんなことぐらいで弱気になってどうするの！頑張るしかないやろ？俺、お前が教師になること応援してるから…」彼は、4月から社会人として働いていました。「素晴らしい夢があるんだから頑張れよ！」彼の言葉がとても嬉しくて、前向きになることができました。次の日、また事務室を訪ね、副免の取得方法を詳しく教えてもらいました。私は、1、2年生のうち、まったく他の教科を受講する時間もありませんでした。大学で10時頃まで残って実験等していることもありました。確かにこれでは、4年間で他教科の免許なんてとれるわけないのかなと思っていました。3年生になり、少し空いているコマが出てきました。私は、入れられるところはすべて副免を取得するための授業を入れるようにしました。4年生後期は卒業論文のこと以外、授業はほとんどないという同級生が多い中、私は、数学の授業を受けていました。副免がとれることを前提に採用試験受け、幸い合格していました。だからこそ、主免(自分が専攻している科目の免許)の単位はもちろんのこと、4年生後期の単位をすべてとらなくてははいけませんでしたが。必死で勉強しました。そして、私は何とか4年間で数学の副免をとることができました。

(⇒次ページへ続く)

大学の先生からも「君は、数学の副免をとったんだってね～。この科は忙しいからなかなか4年間ではとれないのに…。よく頑張ったね！ぜひ、いい先生になってくださいね！」と声をかけていただきました。22歳のいい大人でも褒められるのは嬉しいものです。そして私は、そのときの気持ちを持ち続け、意気揚々と最初の赴任先の学校へと行ったのです。（その赴任先で、何度も打ちのめされることも知らずに…。その話はまた機会があればさせていただきます）

「色覚異常」である私が、教師になって心がけていることがあります。それは板書です。特にチョークの色、提示するカードなどの色です。チョークの緑、赤、青などが見にくい子どももいるのです。両端の前の席の子はさらに見にくくなります。だから、私は、チョークは、白と黄色を基本にしています。赤、青を使うことはもちろんありますが、私は自分が一番見えづらかった緑は使いません。私が、小学生のときや中学生のときに感じた変な劣等感を感じさせないでいいように少しは心がけているつもりです。「色覚異常」の子どもは、男の子で5%、女の子で0.2%とされています。男の子は20人に1人という計算になります。どのクラスも男子が20人近くいるので、クラスに1人はいるということです。そういうことを考えて板書だけでなく「色」についても気をつけてもらえるとうれしいと私は思います。「ユニバーサルデザイン」という言葉があります。すべての人が使いやすい、見やすいことってとても大事だと自分の経験から思うのです。

あるとき、こんなことがありました。夏休みの家庭訪問を行ったときの話です。あるお母さんがこう言われました。「先生、実は、私の息子は色覚異常なんです。そのことを息子はすごく気にしていて、悩んでいるのです。後ろ向きなことを言ったり、自分に自信がもてなくて落ち込んだるのです。どうしたらいいのでしょうか？」私は、こう答えました。「私も実は色覚異常です。私も悩んだ時期がありました。でも、こうして教師として働いています。不便な部分も確かにありますが、大丈夫です。せっかくだから、〇〇君に今から話しをしますよ。」部屋にいた〇〇君を呼んでもらい、私の経験を話しました。〇〇君は、真剣にうなづきながら聞いていました。隣にいたお母さんは涙を流していました。私の話が終わると、〇〇君は笑顔で「ありがとうございました！」と言ってくれました。お母さんは、「先生、今日は本当にいい日になりました。私が勇気づけられました。どんな状況であれ、やっぱり頑張ることが一番だと思います。言い訳をせず、今生きていることに幸せを感じ精一杯に努力をする。そうすることで必ず道は開ける。息子もこれからしっかりと前を向いて、自分と向き合い頑張ってくれると思います。先生と出会えてよかったです。ありがとうございました。これからもご指導よろしくお願いします。」深々と頭を下げられるお母さんに、私はとても恐縮しながら、なんだか自分ももっと頑張らなきゃ！って思えた家庭訪問でした。そして、私が中学生時代にとっても嫌だったこと、そしてこれまでに経験してきたことが、人の役に立ったのだと思い、そのことを嬉しく思いました。

私たち教師も人間です。様々な悩みももっています。そして、中学生の子どもたちも子どもたちなりの様々な悩みを抱えています。しかし、それを乗り越え一生懸命に生きていくことが大切だと思います。できるだけ多くのコミュニケーションをとりながらよりよい人間関係をつくり、共に励まし合い、支えあい、笑顔と元気が出る教室、職員室、学校をつくっていきたいと思います…